

寿楽委員からのご質問に対して（回答）

東京大学大学院新領域創成科学研究科

徳永 朋祥

寿楽委員のご指摘の通り、私が前回の WG で説明した内容は、地下環境の中には、放射性廃棄物処分を実現するための一つのオプションである地層処分を、現在までに考えられてきた概念に基づいて実現するうえで、十分に適切な場が存在するという事を述べたものであり、それが、「地層処分こそが社会にとって最善の選択である」ということを直接的に述べているものではないと私も考えています。

2 つ目以降のパラグラフでのご指摘に関しては、私のこれらの分野への理解が不十分なため、適切に回答できているかどうかは不安ですが、科学・技術に直接関係する見地以外の要素についても検討をすることが必要であるのはその通りであると考えておりますし、地圏を対象とした今までの様々な開発事業においては、そのような検討が多かれ少なかれ実施され、そのうえで事業が進められてきているということも事実だと理解しています。これらの努力の結果、いわゆる **common sense** に基づいて社会が判断・処理することが可能となるに至っているという面もあるのではないのでしょうか。実際には、国内外の多くの大規模開発プロジェクトにおいても、いわゆる社会的議論に苦労を要してきたという事実はあり、また、ある種の失敗と反省に基づき **common sense** が醸成されてきたと理解することもできるのではないかと思います。

放射性廃棄物処分に関しても、日本国内では 1976 年以降現在に至るまで、継続して研究開発や議論がなされてきていると認識しており、その過程において、科学・技術の観点以外のものの見方も念頭に置いた議論がなされ、時期毎に、取りまとめがなされていると理解しています。この過程は放射性廃棄物処分という問題に特有のものではなく、検討の時間・空間スケールは違うものの、科学・技術を社会の中で利用していく場合に、しばしば行われてきている作業と同種のものだと考えています。重要なことは、その中でどのような議論がなされ、どのように合意が得られた（得られていない）のか、また、どのような判断がなされてきているのかを、正確に理解するという事のように思います。放射性廃棄物処分に関わる問題と他の問題の違いという観点から考えると、前者が、かなり長い期間議論がなされてきていること、また、事業そのものの持つ特性として長期にわたるものであるということによって、他の事業とは異なり、どのように議論がなされ、合意が形成されていくのかという過程そのものが、何世代にもわたって引き継ぎながら行われざるを得ず、その部分に難しさがあるということかもしれないと考えたりもします。

以上述べてまいりましたことからお分かりいただけたと思いますが、私は、放射性廃棄物処分を科学・技術に関わる他の多くの問題と質的に区別するという立場には、それほど賛同はしません。なお、「質的に区別する」の「質」を正確に定義できていない、もしくは

寿楽委員の考えているものと同じではないこともありうると思いますので、その点は、さらなる議論と相互の考え方の理解に向けての努力が必要であると認識しています。そのうえで、寿楽委員からの問いかけに対してより良い回答ができるようになるものと考えています。